

Form J (F O)

提出日 Submission Date: 2010/ 12/ 25

博士学位論文審査報告書 Summary of Doctoral Thesis and Report of Examination

研究科長 殿
下記のとおり、審査結果を報告します。

To the Dean:
We report the result of Examination for the Doctoral Thesis below.

学籍番号 Student I.D. No.: 4004S007-3

学生氏名 Name: 唐澤 理恵

和文題名 Title in Japanese: 職業と顔の関連性～左右顔の印象差と職業評定差からみる、
職業的アイデンティティと顔の関係～

英文題名 Title in English: Relationship between Faces and Professions: Impression Difference
between Left and Right Faces

記

1. 口述試験参加教員 Faculty Members Involved in Oral Examination

審査委員会主査 Chief Referee of the Screening Committee

氏名 Name: 大江 建 印

所属 Affiliated Institution: 商学研究科

資格 Status: 教授

博士学位名・取得大学名: Ph.D. Title Earned・Name of Institution
Ph.D. メリーランド大学

副査（審査委員 1）Deputy Advisor (Member of Screening Committee 1)

氏名 Name: 柳 孝一 印

所属 Affiliated Institution: 商学研究科

資格 Status: 教授

博士学位名・取得大学名: Ph.D. Title Earned・Name of Institution
学術博士 早稲田大学

審査委員 2 Member of Screening Committee 2

氏名 Name: 永井 猛 印

所属 Affiliated Institution: 商学研究科

資格 Status: 教授

博士学位名・取得大学名: Ph.D. Title Earned・Name of Institution

審査委員 3 Member of Screening Committee 3

氏名 Name: 河野 光雄 印

所属 Affiliated Institution: 中央大学

資格 Status: 教授

博士学位名・取得大学名: Ph.D. Title Earned・Name of Institution
理学博士 東京大学

2. 添付資料 Attached document(s)

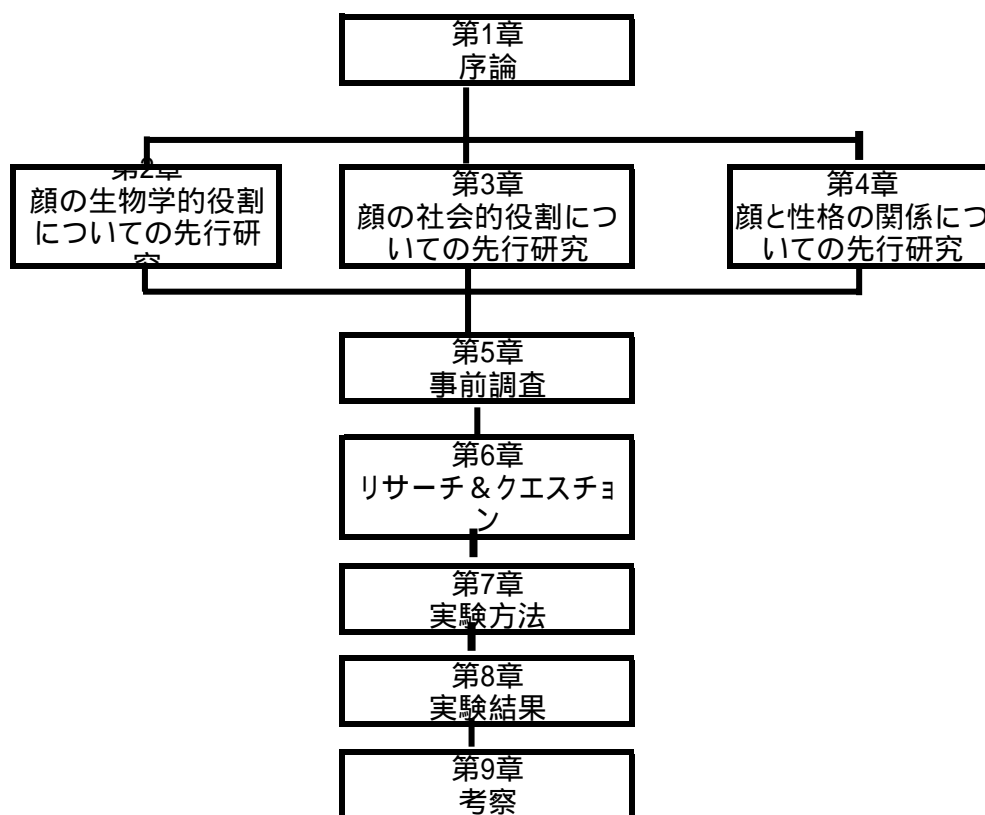
6 枚 pages (和文 5229 字)

博士学位論文審査報告書

博士学位論文 提出者	唐澤 理恵 (学籍番号:4004S651-7)
論文題名	職業と顔の関連性～左右顔の印象差と職業評定差からみる、職業的アイデンティと顔の関係～ (英文:.) Relationship between Faces and Professions: Impression Difference between Left and Right Faces

．本論文の構成

唐澤理恵氏の博士学位論文「職業と顔の関連性～左右顔の印象差と職業評定差からみる、職業的アイデンティと顔の関係～」は、顔は社会的コミュニケーション場面において重要な情報源であるにもかかわらず、今までに理論的に、実証的な研究は少ない分野で、理論的・実践的アプローチに基づく非常にチャレンジ精神に富む研究論文である。この論文の構成は、図表1のようになっている。第1章では序論として、研究の課題、目的、概説と人相学の歴史と現状について述べている。第2章は、顔の生物学的役割についての先行研究を取り上げている。顔の起源と進化、表情の発達と意味、顔の魅力と進化について述べている。第3章は、顔の社会的役割についての先行研究が取り上げられている。顔にみる年齢と意味、表情の認知と役割、顔の認知、顔の魅力の社会的意味について述べている。第4章、顔と性格の関係についての先行研究について述べている。顔の形態と印象、顔で人を判断する意味、童顔の効果、魅力威光の効果、顔と性格との関連性について述べている。第5章は、事前調査として、職業らしさと職業適性、顔についての事前調査を述べている。第6章は、第2章、第3章、第4章の先行研究から得られた知見をもとに、リサーチクエスションと仮説について述べている。第7章に仮説の検証方法を説明し、第8章には、実験結果について述べている。第9章に本研究の考察を加えている。



. 本論文の内容

唐澤理恵氏は、大学卒業後、株式会社ノエビアに入社し、女性の美容関連商品の販売や営業を経験し、取締役を歴任した。早稲田大学アジア太平洋大学院で修士号を取得した後、株式会社パーソナルデザイン社を創立し、イメージコンサルタントとしてこの分野の草分けの役割を果たしてきた。特に多くの男性のイメージコンサルタントとして、顔と職業の間に一連の関係性があるのではないかという直感的観察を抱くことになり、論文のリサーチクエスチョンが生まれた。各章の概要は次の通りである。

第1章 序論

ここではまず、本研究の課題として、顔をはじめとする外見は、社会的コミュニケーションにおいて有効な情報源であり、初対面の相手に対しては顔や髪型、衣服、仕草などをみて、どんな人かを推測したうえで、その時々 of 相手とのコミュニケーションの方法を模索している。また、一度会ったことのある人を認知することは人間関係をはぐくむうえで重要であり、人間が社会生活をするうえで必要不可欠な機能である。そのために利用可能な情報をもとに対人認知を行うのであるが、その情報とは外観的要素の他に、周辺の要素である。しかし、対人認知においてメラビアンの法則：視覚情報が55%を占めている。この法則が本研究の出発点になっている。本研究の目的として、職業と顔の関連性を導き出すこと、職業的アイデンティティ形成と顔の変化の相互作用を明確化すること、職業毎の能力適性や性格適正、印象適正を導き出すことで職業選択やコミュニケーションスキルアッ

ブのための新しい手法を作ることが目的である。そこで、研究の意義として、人材適正評価への新しい視点、人材教育の新しい視点、コーポレートイメージ戦略の新しい視点が取りあげられている。

第2章 顔の生物学的役割についての先行研究

この章で唐澤理恵氏は、顔の起源と進化、表情の発達と意味、顔の魅力と進化の先行研究を取り上げている。対人コミュニケーションの非言語情報には、口調などの聴覚情報と見た目の視覚情報があり、この非言語コミュニケーションが相手の評価に大きく影響するメラビアン¹¹の法則や、また人の評価は最初の4分で決定するというズーニンの法則などの序論で述べている先行研究と、ヒトの顔が生物学的にどのように進化してきたかの先行研究とをつなげることで顔のもつ意味を明確にすることを目的としている。また表情については、霊長類からの筋肉の発達、現存のサル¹²の種別による表情の意味の違いなどの先行研究、顔から年齢を認知することの生物学的な意味についての先行研究について取り上げている。

第3章 顔の社会的役割についての先行研究

この章では、顔にみる年齢と意味受けや、表情の認知と役割、顔の認知、顔の魅力の社旗¹³的意味についての先行研究を取り上げている。とくに、ヒトの表情筋の活動個性に伴い、緩やかに発達することの先行研究論文、表情に個人差があり、個体識別のための表情の個性として社会的な対人認知に役に立つことを取り上げている。また表情の認識は、右半球脳が優位であり、右半球では概略的認識、左半球では分析的認識があるという先行研究や、表情が「瞬間な信号」とすると、加齢などによるしわや色素変化は「緩やかな信号」、肌の色や骨格などを「静的な信号」として区分する先行研究が取り上げられている。また、左右顔の違いに対する先行研究についても取り上げられている。

第4章 顔と性格の関係についての先行研究

ここでは、顔の形態と印象についての先行研究が取り上げられている。特に目の位置による印象差があることの先行研究で、目の高さや目と目の間の距離を取り上げている。実際にリーダーの選択に影響しているという。また童顔や大人顔による印象と相手の行動への影響を述べている。顔の認知にはステレオタイプなメカニズムがあり、ステレオタイプ化された犯罪者の顔は警戒されやすいという先行研究を取り上げている。顔の性格の関係のフレームワークとして、Leslie A. Zebrowitz¹⁴の先行研究をベースに唐澤理恵氏は、顔と性格との関係概念の定義として、人種や民族や遺伝などの生物学的要因は容姿と性格・能力の両方に影響を及ぼすことと、家族や友人や職業や地域社会などの環境要因も容姿と性格・能力の両方に影響を及ぼすことと、性格・能力はそれに見合った容姿を生むドリアン・グレー効果や、性格・能力は全く見合わない容姿を生むという策略効果、容姿はそれに見合った性格・能力を生むという期待充足的予言効果、容姿はそれに全く見合わない性格・能力を生む期待打破的予言効果を取り上げている。

第5章 事前調査

ここでは、「職業らしさ」と「職業適正」、適性検査の現状について先行研究と、顔についての事前調査について取り上げている。この事前調査で、目の位置やバランスなどの顔の形態から受ける印象と職業を推測する評定において一貫性があるかどうかの調査をしている。この調査では、先行研究で取り上げた原島教授の作成し

た平均顔から連想される職業について54名の社会人男女にWEB上にて実施している。この調査では、用意された平均顔は、銀行員、格闘家、政治家の3つであるが、平均顔と連想職業との関係の有意性を検証している。また実在の銀行員、営業マン、医師についての調査でも有意性が証明されている。職業らしい顔の存在とそれを感知する正確さが検証された。

第6章 リサーチクエスチョン

第2章、第3章、第4章の先行研究と第5章の事前調査から、人間の左右の顔にはどんな違いがあるのかどうか、その要因は何であるのか、顔の印象から期待される役割はどんなものであるか等がリサーチクエスチョンとして取り上げられた。そして、3つの仮説が策定されている。仮説1は「人の左右の顔は異なる印象を持つ」、仮説2は、「職業的アイデンティティ形成に伴い職業らしい顔が、右側の顔に表出する」、そして仮説3は「顔タイプ別印象マップおよびパーソナルデザインマップは妥当である」。

第7章 実験方法

3つの仮説を検証するために、リサーチ会社の協力を得て、成人男女510名にインターネットを利用して実験をした。実験に使われた顔モデルは、唐澤理恵氏のパーソナルデザインスタジオの来客者の内、実験参加承諾者男性17名である。一人のモデルについて、4種類の顔画像を作成した：正面顔画像、逆正面顔画像、左側顔画像、右側顔画像である。このうち左側顔画像と右側顔画像の2画像に対して、顔タイプ別印象マップ、顔の印象評定、適する職業評定、を答えてもらった。一人の顔モデルについて30人ずつの成人男女が答えた。

第8章 実験結果

顔タイプ評定の左右差について、左顔画像はソフトタイプの割合が高く、右側顔画像はハードタイプの割合が高いことから違いが解明された。また顔の印象評定を24種類の印象ワードから洗濯してもらう方法で行った結果、印象評定について左右差が認められた。適する職業評定を17種類の職業から3つの職業を選択してもらう方法で行った結果、適する職業評定について左右差があることが検証された。さらに、これらの実験結果が回答者の性別や年齢別、地域別に関係がなく一貫性があることが検証されたと述べている。

第9章 考察

実験の結果、「顔のタイプからの印象評定や職業評定には一貫性がある」ことが検証され、更に「対人関係を主とする職業においては右顔は左顔よりも実際の「職業らしい顔」である」ことが、「顔タイプ別印象マップおよびパーソナルデザインマップは妥当である」ことが、それぞれ検証されたと述べている。

・評価

審査委員会での指摘と指導の基に論文を修正を加えている。

1. 本調査における刺激サンプリング選定妥当性の明記する必要性が指摘され、本調査で使用した刺激顔サンプル選定について、さらに詳細な選定経過および説明を加えることで、妥当性について明らかにした。

2. 本研究における統計分析方法や統計分析方法の選定について用語の確認、さらに選定した理由・意味についてさらに説明を加える必要性を指摘された。顔の細部を数量化するという工学的な目的ではなく、人が相手の顔、特に左右の顔からどういう印象を感じるかというマーケティング的な目的のもとに研究を実施した主旨についての説明などを研究の目的において明確にした。ソフトーハード、ウォームークールの基軸については、クロス集計だけでなく、数量化三類で実施をして、印象ワードと顔タイプについてはきれいに4タイプに分かれたことをつけくわえられている。職業ワードについては、2タイプにしか分類できなかったのもので、今後の課題ということである。

3. 本研究以外の情報の精査を行うことの、実業で行っている情報データなど、本研究で言及するに至らなかったものは精査し、本論文から省略、もしくは、結果からの関連性があれば、さらに詳細を加筆する必要性も指摘され、修正が加えられた。

学術的な意義

本研究の学術的な意義は、次のように要約することができる。

1. 「人の左右顔は異なる印象を持つこと」を統計的に検証し、直感的仮説が検証された。

人の左右の顔の印象は異なり、更に人は微妙な違いによる顔タイプから性格印象を推測し、さらに職業をも推測することの可能性をしめした。人が抱くその印象差の結果は年齢、性別、居住地域に関係なく、一貫性があることを明確に統計的有意性があることを示した。

2. 「職業的アイデンティティ形成に伴い「職業らしい顔」が右側の顔に表出している」という直感的仮説を検証した。

限られた職業においては実際の職業を右の顔において適確に推定できる可能性を明確にしたことが評価できる。

3. 非常にファジーな観察や直感などの多い研究分野に、直感的仮説に統計的方法を取り入れて検証することに挑戦したことは大いに評価できる。この研究から非言語コミュニケーションの研究分野が進展する可能性を明確にした点も評価できる。

実務上の意義

1. 人材適正評価への新たな視点を投入した

中途採用の面接試験の場面などにおいて、顔写真や顔印象からの情報がもっと有効に利用することができる可能性があることを証明した。

2. 人材教育の新たな視点の投入

対人コミュニケーションにおける非言語情報としての視覚情報の重要性が再確認されたことから、顔印象の重要性を外見マネジメントの向上に利用できる可能性を示唆した。

課題

今後の課題としては、以下の点が挙げられる。

本論文における研究では、残念ながら職業が限定されていて、多くの職業に拡張する必要がある。また、男性だけに対象が限られていて、女性を対象とした研究が必要になる、また本研究の対象年齢層が中高年齢層に限定されているので、幅を広げ検証を進める必要がある。更に日本人だけが対象になっているが、人種や文化による違いなどを検証する必要もある。

博士学位申請論文として提出された唐澤氏の「職業と顔の関連性～左右顔の印象差と職業評定差からみる、職業的アイデンティと顔の関係～」は、指摘されている様に、審査委員の更なる期待を含む課題はあるが、学術的な意義が認められ、かつ実務上の示唆としても評価される論文である。これにより、審査委員一同は、提出論文が博士学位申請論文としての評価に耐え得るものと判断し、学位授与が妥当であるとの結論に至った。

以上